

光の子

発行／社会福祉法人 光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480-72-3883
振替／東京 3-128022
印刷／社会福祉法人 共愛会



絵・中島 英子

いきげん

いかがですか

賜物を生かして互いに仕えよ

(ペテロの第一の手紙 第四章十節)

理事長 福島 勲

人は誰でも名誉栄達を望む。

しかし、同時に劣等感に悩まされる。誰にも負けたくない、勝とうと力むと共に、どうして自分

分は、他人と比べてこうも出来が悪いのか、親を恨むわけではないが、遺伝子が悪いのだ。と

嘆く。人は平等に生まれついて

いるなどと説くのを聞くと、腹立たしくなり、馬鹿は休み休みに

に言え、現実を見極めぬ世迷い言だと決めつける。

確かに下から眺めれば、良いところがない。上から考えよう。

上からとは、キリストの十字架を通してである。

十字架は下から見れば最悪の極刑である。

しかし、神の国からすれば、無限の愛の賜物である。

十字架を信じるということでは救しと救いの基本的な平等の賜物を受けているのである。

ここからもう一度自分の賜物について考えてみよう。

イエスの十二使徒の人となり

を詳しく知る由もないが、大雑把に見ても、それぞれ異なった性格や才能の持ち主である。

いてもよさそうに思われるのに、不思議と学者がいない。政治家も加わっていない。役人といえ

ば、僅かに下っ端の税関吏マタイだろうか。

イエスはどのようなお考えで弟子たちを選ばれたのだろうか。

知に走る者は情に薄く、批判的で懐疑的、他を見下して独善的に振る舞う。權威に座する者は

まさしく虎の威を借りる狐の類、これまた他を睥睨して真実

を尽くさない。

それでいて弟子たちのうちには、利に聡い者、怒りっぽい者

疑い深い者などいて、いずれもエリートでもベテランでもない。

しかし、彼ら選ばれて宣教の大事業に携わる栄光を与えられたのである。

われわれも召されている。改めて素直に自己評価をしよう。

欲張りの望みは捨てねばなら

虹の国から

中学生になって

水谷 萌季

小学生の時は、中学生になるのはいやだなあと、何となく思っていました。しかし、いよいよ四月十日がやってきて入学してからは、すごく楽しいと思うようになりました。

最初のうちは同じ学校からやってきた友達とおしゃべりしたり遊んだりしていました。でも、だんだんに学校や通学の景色などに慣れて、新しい友だちともそれがずっと出来るようになってきました。クラスを超えて、入ろうとしている部活動が一緒の人などとも何回かおしゃべりするうちに友だちになった人もいます。

先生もとても面白い人ですし、部活の先輩も優しくしてくれます。でも、とても仲の良かった友だちが違うクラスになったり、転校していったりするのを思うと、悲しくなってしまう。

中学生になってから出来た友だちと話すときは、小学生のときとは違って緊張してしまうときがあります。だから、小学校の時の友だちと同じようにしゃべれるように早くなれると思います。

中学校は、勉強がとても難しいです。小学校の時の成績はまあまあ良い方だったのですが、これからはみんなより、後れをとるかも知れません。でも、みんなより遅れないようにがんばりたいと思っています。

部活動は、ソフトボール部に入りました。毎日が練習なのでついでにいくのによつとですが、お父さんから入部の記念にもらったグローブに負けないようにがんばりたいと思います。

エッセイ

ウィーンわが夢の街

県立高校美術教諭 中島 陸雄

私は、市川倫子さんという歌手の歌を聴いていた。コロラチュールのハイソプラノという声だそうで、澄んだ優雅さに溢れた歌である。十三・四曲あるCDの中で、私が最も好きなのは、シ・チンスキー作曲の「ウィーンわが夢の街」である。これは素晴らしい。私は、この曲を繰り返し繰り返し聞いた。何回聞いても、その度に心が震える。

二年ほど前に私は、ある小さな芸術鑑賞会の運営の手伝いをしていた。この会では、秀れた音楽や演劇を身近で鑑賞しようとして作られたものだ。しかし、会員数が少なく、いつも資金不足に悩まされ続けていた。それを補うために、知り合いの画家にお願いして個展を開き、絵の売り上げをこの会に入れてもらったり、バザーをやったりもした。今、思い返してみると、よくもこんな凄い人を、こんな田舎町まで呼んできたものだという感じの一流の人たちが多い。

その中の一人が市川倫子さんだったのである。ところがコンサートの日には、何やかや用事があって、運営に携わる人間は落ちついて客席に座っているわけにはいかない。そこでCDを買ってきて、せめて音だけでも聞いてみようとしたのであった。

けれども、いつもいつも苦勞を重ねてやつとコンサートに過ぎ着けるものだから、終わってしまえばそれっきり。したがってそのCDも、封も切らずに二年ぐらい放っておいた。その後何の気なしに封を解いて聞いてみると、いっぺんでもうすっかり心を奪われてしまった。ヨーロッパ的な気品に満ちた曲、愛情深い詞、そして美しい声。私は、感動に涙が溢れそうであった。特に「ウィーンわが夢の街」が圧倒的であった。

喜びも悲しみも
みんなこの街に
夜でも昼でも

ない。水に映る獲物を欲しがって、吠えたてた犬が、折角啜えていたものを落としてしまうというイソップ物語の寓意にも学ばなければならぬ。

多く与えられる者は、多く求められる（ルカ・十二・四八）
与えられることは（Aufgabe）課題を課せられること（Aufgabe）である。

たとえ、僅かなお金、レプトン二枚を献しても、真実をもってするとき、神はこれを嘉される。（マルコ・十二・四二）

しかし、われわれは常に嬉々として奉仕の業にいそしめる者とは限らない。

時として予期しない強いられた奉仕の業も起こってくる。

イエスの処刑の時、たまたま通りかかったクレネ人シモンのように、十字架を背負わされて、ヴィア・ドロロサ（苦難の道）をゴルゴダの刑場まで運ぶ破目になった、強いられた奉仕の恩寵のあることを心得ていなければならぬ。

私の小学生の時、隣村に後藤新平がやってきた。明治大正時代のスケールの大きい政治家であ

心のなぐさめ

だれにでも愛される

わたしのふるさと

私の心も いつもこの街にはるか聞こえてくる

楽しいうた

ウィーン ウィーン お前は心のふるさとよ

古びた街角 可愛い娘たち

ウィーン ウィーン お前はわたしの夢の街

しあわせあふれる 夢の街
私には、このように聞こえた。

静かで繊細、さざ波のような曲の感動のうねりが、次第に高まってきて、見事に頂点に達する。この曲と詞とは、今の私の心の中に、いやという程に染み込んできた。

人は、苦しみや悲しみを背負う時、本物の音楽に感動するものだろうか、慰めを得るものだろうか。何をやって思うようになる。いかず、出口さえ見えなくなつて、ぼんやりとした不安にとらわれながら時間だけ過ぎていく焦燥感の中で、このような感動的な音楽に出会ふと、私はそれにしがみつく。

私は五・六人の仲間たちと花

あった。

われわれは神社の境内に集められて彼の講話を聞いた。三つのことが語られたのを覚えてい

る。人の世話にならぬよう。人の世話をするように。そして報いを求めぬよう。というものであった。

隣人、地域、社会、国家への甘えの生活をたださねばならぬ。同時に独立生存の者が得てして実際に困窮している人々への思いやりを欠ける。

そして義理や強いられて他愛の行為をするとき、相手の応答をうかがい、しかるべき礼を求めるのである。

報いを求めて行為をすれば、取引であり商売である。愛の業ではなくなる。

聖書のこの箇所は受洗者に対しての説教という説もある。愛の轡を共にする者が、お互いに仕えあうことを勧めている。むくいをするのぞまでひとにあたえよ
こは主のかしこき
みむねならずや。

（讃美歌・五三六）

見と称して騒いでいた。花冷えの夕方ではあったが、アルコールが入ればすぐに寒さを忘れた。それに、久しぶりに会った気のおけない友達の中で、私はすっかり嬉しくなっていた。何かの拍子に音楽の話になったので、私は例の「ウィーンわが夢の街」の話をした。「よい曲だね、それに市川倫子さんがもう・今までの曲に出会わなかったのが残念なくらいだ。」と私は言った。すかさず遠来のAさんが言った。「あなたは幸福だよ、どこから見ても幸せそうだ。」私は「そうかね。」と大声で笑った。

しかし私は、心の中でAさんに反論していた。「今日一番饒舌なのは誰？ おれ。」「一番嬉しそうなのは？ おれもおれ、一番はしゃいでいるのは？ やっぱおれ。」

そしてその反論に、もう一言つけ加えなければならなかった。「最も悲しく最も苦しい人間が、最も楽しく最も振る舞うものなんだよ。」



学者もどきのつばやき (13)

『コンピュータに操られながら』

山形大学医学部教授 仙道 富士郎

小さい頃はあまり機械いじりは好きではなかった。戦後の物資のない頃、友達に鉱石ラジオ作りに興じていたが、ちょっと真似てみるがものにならず、完成品に到達した記憶がない。今でも機械にはめっぽう弱く、未だにビデオの録画の仕方が飲み込めず、愚妻や子どもたちに笑われている始末である。

そんな訳で近頃のパソコンブームには苦々しい思いをしていた。教室には臨床医学講座、理学部生物学科などから十人近い若い人たちが来て研究しているが、彼らのなかにはコンピュータおたくが多く、終日パソコンと向かい合っている者も少なくない。個人面談と称して実験の進み具合をチェックするのだが、彼らの持参するデータはマッキントッシュのパソコンで作られていて、実に美しい。手書きで図表を作ることに苦心してきた者としては、どうも腹立たしい。

新しい時代の文化を享受している若者たちへの嫉妬でもある。私は意地悪く言う。「生のデータを持って来い。」データ処理の間にこぼれ落ちたものがないかと疑うからである。

それにしても、何とも便利な時代になったもので、過日、国際シンポジウム開催の英語のパンフレットを印刷屋に依頼することになり、大学院生と案を練ったときのことである。パソコンに原案をいれて検討しているうちに、驚くべき機能をこの器具が持っていることを私は初めて知らされた。図形を自由に書いたり、字体を変えたり、多色刷りまで出来ると言うではないか。元来凝り性の私は「その字はもっと大きく、そこは網をかけて、もっと赤く強く」などと隣に座って指示し、さすがのコンピュータおたくのK君も困惑気味であった。終了したらそのフロッピーディスクを印刷

屋に渡せば、それに従って印刷するだけという。誰でも印刷屋さんになれる時代になったのである。出来上がってきた二色刷りのパンフレットを眺めながら、何とも妙な気分ではあった。

この辺から私のパソコン嫌いは少しく怪しくなりだした。そして、大学院の卒業生がお札に最新式の電子手帳Z A U R U Sをプレゼントしてくれた時から、私は暇さえあれば、いや暇がなくても(?)、このZ A U R U Sに翻弄される身となってしまった。最近はやうやく使い方をマスターし、使用の手引きに蛍光ペンでアンダーラインを引くことはなくなったが、あまり必要もないのにZ A U R U Sを開いては遊んでしまう。パソコンゲーム少年をあまり責められなくなってしまう。何しろ、便利なのである。国語、漢和、和英、英和の各辞書機能を備え持ち、付属器を購入すればF A Xにもなる。早くZ A U R U Sを使って教室にF A Xを矢継ぎ早に送信し、教室員を悩ますのが密かな楽しみである。

タイピングよく学内ランが整

公告

養護施設光の子どもの家

施設長人事について

今関公雄一九九五年三月三十一日付退職

菅原哲男同年四月一日付任命

社会福祉法人光の子どもの家

理事長 福島 勲

指令児童第五五号

同内容を承認する。

埼玉県知事 土屋義彦

トムソーヤたちの朝 4

日本キリスト教団東大宮教会

永野三恵

四月、待ちこがれていた桜の花が咲き、はや花吹雪の下を歩く時となった。けやきの柔らかな新芽も、口毎に緑が濃くなってきた。私はこの季節が好きだ。日射しの暖かさと共に希望と期待とが周囲に満ち満ちているように感じられる。

光の子どもの家の小林君、栖賀君を社会に送り出した記憶もまだ鮮やかなこの時、教会学校も新学期が始まった。

昨年の反省をふまえ、生徒を迎え入れる体制を新しくし、活動方針を確認しあった。

この十数年、小学校科の子どもたちと過ごしてきた私も、今年度から初めて、中学科を担当することになった。

小学生時代はどの子もかわいが、中学生になると急に背丈が伸び、顔つきもアンバランスになり、何となく悩み多き様相を帯び始める。そうした子どもたちとどんな風に関われるのか、新米教師の私は不安である。

そんなとき、中三になった高山君が「ネーネーどうやったたら頭良くなるの?」と真顔で尋ねてきた。小学生の時、かもしかのような脚で走り回り元氣滲刺だった彼も、もう現実に受験を頭に置き「何とかしなくては...」という思いになってきたのか...

との感慨が私の胸を走った。「本当にやる気になったの?」「私は彼の目を見つめ問い返した。「ウン」少しはにかみながら彼は答えた。「よし。そんなら一緒に勉強しよう。この次から始めるよ。」と気負い込んで答えた私。中学生になった頃から人を疎ましそうに避けているような彼に、声をかけるのも遠慮していたのに、うれいしスタートだった。続けて高井君も「ぼくも、ぼくも」と言ってきた。

あとで、菅原さんにこのことを話したら「何か速効の頭の良くなる薬でも持っていると思っ言ったんじゃないか」と、カッカッと笑われた。でも、私の決

意は変わらない。私でも役に立つことがあるなら、こんなくらいにしたいことはない。

家庭での孤独に耐えきれず何度も家を飛び出してしまいう東君を見てみると、「光の子どもの家」の子どもたちは幸せだな、と感じる時が往々にしてある。いつも全力で、彼らを養育し、守ってくれる職員がいるから。

東君は、いつもうつむき加減で、何か聞いても目を合わせずボソボソとした返事しか、返ってこない。そんな彼が、「兄ちゃんの手を握って、小遣いもらったんだ」と、ぼつんと言った。

「買いたい物があるから、今、貯めているんだ。」とも。「何が買いたいの」と私。「本」私の心は、本と聞いてぐーんと動いた。「どんな本?」「言えないうな」「おそろくマンガだろうな」「友達なら言ってもいいけど」「私には言えない代物かな?」「君、誕生日いつなの?」「五月」「じゃあ、もうすぐね。欲しいと思っている本をプレゼントしたいから、この紙に書いて」と、紙を渡すとすらすらと書いた。受け取った私の目に入っ

てきたのは、『シルバー湖のほとりにて』だ。「えっ、この本? ロール・インガルスだね」恥ずかしそうに笑う、彼の目と私の目は初めて、ぴたりと合った。「文庫のおばさんとしては、是非読んでもらいたいリストに入っているな。君が好きなんて、うれしな。」母親のいない寂しい家庭の彼には、『大草原の小さな家』のあの優しいお母さん、逞しく家族を守るお父さんの暖かい、愛溢れる理想の家庭像が、心奥深くしまわれているのだろう。

いろいろな心の悩みや問題を抱えている中・高生の問題はやっぱり難しい。思春期というやっかいな時期の真っ直中にいる彼らに、容赦なく、家庭や社会の問題がぶつつかってくる。

揺れる子どもたちの心を支え、共有できる家族・友・大人が周囲にいれば、その時期を何とか切り抜けていくことが出来る。

教会学校の教師たちは自分たちの非力さを痛い程知らされているが、唯、唯、祈りつつ子どもたちと関わり、成長を見つめていきたいと願っている。

河のほとり

旗井の家

睦男はとにかくだらしない。
放っておけば電気はつけっぱなし、布団は万年床、洋服は脱ぎっぱなし・・・という状態である。

「やるべきことはやりなさい！」と、何度言っても馬の耳になんともやら・・・部屋にいくたびに「あーもう汚い！」と腹を立てていた。そんな話を菅原先生にした。

「確かに睦男はだらしない、なんとかしなければ。しかし、彼の生い立ちをさかのぼってみると、生まれてから親や家族に甘えた経験がうんと乏しい。睦男自身が意識しているかどうか分からないが、甘えの欲求だとも思える、そうであってもなくても、部屋を片づけてやったり洗濯をしたりしてやって、きれいに暮らすことの快さを知らせてやったらいい。」と、アドヴァイスされた。

高校三年の睦男はおそらく来年ここを出て行くだろう。自立を目前にしている彼のことを思うと、何でも自分で出来るように訓練しなければ・・・と、焦っていた。しかし、よく考えてみれば彼の傍に出来るものもあと一年。私が彼にしてあげられることなど限られている。彼の後ろについて電気を消すことや、布団をたたむこと、洗濯をしてあげること、そんな他愛ないことで彼がホッとするならば・・・そう考えるようになってきた。

そう思うと、電気がつけばなしでも、部屋が汚れていても、不思議に腹が立たなくなってきた。

彼は様々な理由から母を快く思っていない。同じ女性として、母に代わる存在として、彼とつきあう者として『母親』へのイメージが緩和されれば私も望外の幸せであり、彼とつても幸せだろう。

今は彼に伝わらなくても、感謝されなくても、彼が自立していったときに『そういえばこんなことしてもらったな』そんな風に思える時がきくと来るだろう・・・きっと。そう思う。 倉沢 智子

原田家日記

竹花 信恵

四月四日 通じないだろうと思いつつ、何十回目かの電話をかける。新学期を目前とした姉妹に、父とのひとときを、との願いを込めてとり続けた連絡だった。思いがけず父親の声。

近くまで出かける中学生の行事に便乗して連れていきたいということでお話した。笑顔溢れるリュック姿の二人が行き着いた先の父宅は不在。待ったが来る気配もない。

元氣いっぱいの中学生たちと春を楽しむ一日へとすりかわった。帰宅後、父に手紙を書く。妹の手紙には「私の好きな人」リスト一覽表がいてねいに書かれていた。私の名のずっと上の上のトップの座に「お父さん」と書かれていた。

四月七日 潔にもこんな時期が来た。鏡の前で「髪型」を整える。初めは、そおと見守ってきたが、あまりの長さに、「風邪を引くよ」「もう充分かいいいよ」「人間中身が一番」と、次々に声と視線が集まる。ひとつひとつ一言一言返事をしつつ、「自分」に向き合う顔は真剣だった。初めての横分けヘアスタイルに照れて振り向く中学二年生の春。

四月十一日 兄に引き続き来春、社会へ出発つ息子。事情により中三の加津子と生活の場を共にすることになった。

今までは、二人いっしょはほめられることより、マイナスに動いてしまうことが多い仲の良さ。その転換は新メンバーでの家運営の柱である。自らのことで精いっぱいでありながら、加津子が喧嘩すれば「今は興奮しているからおとしとして。」加津子がやりたいたいと思っていることに対して「一度やらせてみて考えさせた方がいいと思う」とアドヴァイスしてくれる。

加津子も兄子の帰宅を待つ相談事にのっもらっている。もう何年も会っていない加津子と同じ年の実の妹を重ね合わせている兄子の心を感じている。

子どもたちの季節

仙道家

新学期ももうすぐの春休みのある日。溪子、一志、環の三人とお出かけをしました。

城山兄弟が祖父宅に帰省しているときでした。前日に「明日、教会学校のあとミュージカルを見に行こうね。」と話しました。

「ピーターパンのミュージカルだよ」と言ったのですが、環だけが何を勘違いしたのか『ピノキオ、ピノキオ』とはしゃいでいました。

一志は「地下鉄サリン事件」のあとでもあり、「地下鉄には乗りたくない！」と顔をこわばらせていました。

さて、日曜日。教会学校のあと、JRに乗り、いざ渋谷へ。

溪子と一志はぴったりと私にくっつき、環は、「疲れた」としゃがんでしまう車中でした。

渋谷に着いてからは、あこがれの『マクドナルド』で昼食をとり、『子どもの城』で、開演時間まで三人は思いきり遊びました。

四時の開演時間が近づき、劇場に入りました。ちょっと遊びすぎたようすの三人。環は、まだ始まる前から、「いつ終わる？」と何度も聞いてきます。

いよいよ始まり、飛ぶ、飛ぶ！ピーターパンが空を飛ぶ・・・そんな興味のあるシーンは見ますが、「もう終わる？」と聞く環。一志は「寝ていい？」と眠り始めます。まともに観ていたのは溪子だけのミュージカル鑑賞でした。

帰りは、無事に通過することを祈りながら地下鉄に乗り、レストランで豪華な夕食をとり、家に着いたときはもうすっかり夜も更けていました。

食事や買い物たびに「ゆう子さん、お金大丈夫？」と心配してくれた溪子、一志、環、楽しい時間をありがとう。 池田 祐子

光の中で

佐藤家

ケヤキの新緑が今年も新しい季節が始まったことを知らせてくれる。子どもたちも新学期を迎え確実に自分の力で成長している姿がケヤキのように逞しい。私にも新学期があったら十年間でもう少し成長したかなと、ばかばか陽気の中ではんやり考える。そんな甘えの気持ちのままに十一年目はスターとした。

十一年目の佐藤家は新しい顔がイキイキと並んだ。共に暮らすのは初めてでも、光の子どもの家で暮らす仲間としてスムーズに生活を展開しているようだ。その中で愛犬コロだけが変わらず佐藤家の番犬として悠々と暮らしている。そしてこの愛犬がどんな形にせよ、七人の子どもたちそれぞれ心の拠り所となっているようだ。

高校生になった光子、妹の紅子は夕食後のひととき必ずコロの所に行き、何やかやとコロ相手に会話をしている。光子は帰宅時間も夕食ぎりぎりになり、散歩に行かなくなったが、その分コロのストレスも減ったようで、光子から逃げる姿が見られなくなった。

五年生の珠弥は、寝る前にコロが寝そべっているところで一緒に寝ころんで体をなでてから「おやすみ」と言って部屋に戻る。コロへの愛情表現の余裕が感じられコロの世話係を言い出してよくやっているのは、以前よりも落ちついた生活の表れといえる。

ときどき他家の子が散歩についてきたり、「散歩に連れてっていい」と言ってきたりしたりほっとする時をコロは得ているようだ。衣壮年を迎え、きちんとした教育をしてあげられない日々を悔やむが、なくてはならない存在になっていることを思い知らされる。またそのほっとする存在になれない自分は、話しが出来るからなのかなーなどと省みている頃である。

結婚して家庭を持ったために帰る日がなくなったが、子どもたちが寝たあと、玄関を出る前に、しっかり留守番してね、と頼んで、頭をちよっとなぜしてからドアを閉めかけるのである。坂巻 照子

現場から

のびやかにふくよかに

笹山 恵理

陽の光の暖かさに眠っていた蛙も起きだし、夏まで待てないといふかのようににぎやかに唱え始めた。子どもたちも着ていた服を一枚脱いで、伸びやかに暮らしております。

初めまして！本年度より光の子どもが保母として勤務させていただき、現在佐藤家で暮らしております。笹山恵理と申します。よろしくお願い致します。

この度、新人でありながら、表現の場を頂き、不安と幸運の入り交じった思いであります。光の子どもの家を応援して下さっている皆様には、目に余る部分も多々あるかと思いますが、光の子どもの家の「今」を少しでもお伝えできるよう努力して参りたいと思っております。よろしくおつき合下さりご指導下さいますようお願い致します。さて現在光の子どもの家には子ども二十七名職員十五名が生活しています。そして今回は、子どもにも職員にも含まれてい

ない一匹の犬を紹介致します。

名前はコロ。秋田犬。佐藤家玄関在住。六歳。光子に言わせると「いいおじさん」なのだそう。体重は三〇（という噂）の大型犬。私が光の子どもの家に来て一カ月が過ぎた今、この主は実はコロではないかと睨んでいます。彼（オスという噂）の一日は次のようです。

AM五時四〇分頃佐藤家の人々が目覚め出す頃、たいいてい彼は起きていたので起床時間は不明です。朝起きた佐藤家の人々はたいいてい「おはようコロ」と声をかけます。おはようは、その最初の運命的な出会いを喜び、気持ちよい一口をスタートさせるための大切な挨拶だと考えている佐藤家です。その佐藤家の住人（犬？）でありながら、彼は誰が声をかけても、おおらかに横たわっているばかりです。彼の世話を一手に担っている珠弥は朝コロを玄関から庭に移動させることを忘れません。コ

ロは待つてましたとばかりに外へ出て、暖まった土の上に横たわります。また、一晩中にたまったものがある時は、それを勢よく排出させたりもします。

それからあとの一日は、チューリップの香りを嗅いだり、蝶と戯れたり・だといひのですが、彼はもっぱら横たわり陽の光を思う存分浴びて目をとろんとさせます。一日一度の散歩が唯一彼の動き回る時間の少し肥り気味のコロ、そんなコロを子どもたちは大好きです。

『コロくさい、コロかわい』と、思いきりコロをくしゃくしゃになるまでなでる萌季、『コロはいいよなーいつも寝て勉強しなくていいし』と溜息まじりの潔。『コロ！靴の上に乗っちゃダメっていつもいつてでしょ！』と、どうしてわかんないの！と、まるで保母を真似するかのようコロを叱る珠弥。『コロ、かむ？今、怒る？』と、佐藤家に来たばかりの頃は怖さと近付きたい思いでいっぱいだった啓二も、最近は玄関先に座って話しかけ、『コロにエサあげ』と、仲良くなった様子。こ

んな風にして子どもたちは時に可愛がり、時にはグチをいったりとコロに思いを語ります。

言葉に出来ない思いをたくさん持つ子どもたちです。明るく元気に暮らしているけれど、生活の中でのストレスは想像を超えるものでしょう。そんな子どもたち自身も気づいていないかも知れない心をコロだけは知り、よい聞き手となっているのです。

私自身も光の子どもの家での暮らし初めが佐藤家であり、そこにコロがいてくれたことによつてどれだけ救われたか知れません。またコロを媒介にして子どもたちと同じ時を過ごし、思いを同じにしたことも一度や二度ではありません。

ありがとう、コロ。コロはこれからたくさんの人を、誰一人分けへだてなく助けてくれるんだろね。まだコロと暮らし始めて一ヶ月。コロのことを、光の子どもの家の中で誰よりも知っていない私だけど、これからも子どもたち共々よろしく。初めての人にはは映えることもありますが、コロのいる光の子どもの家にお出かけ下さい。

養護メモ 55

家族 その九 『協力』 1

菅原 哲男

養護施設光の子どもの家は、都市化するこの国の暮らしのなかで、元来、家族の関係にあった「力」が衰退の一途をたどり、やせ衰えたその「力」の責めを施設入所という形で一身に負わされた子どもたちの、そのなかのあらゆる不条理や発達のすべての障壁を取り除き、生きることはよいことであると確信することが出来るような暮らしを創ることを願って建てられた。

それにしても最も保護されなければならぬはずの子どもたちが負った不条理や障壁のなんと多くそして重いことだろう。何よりも愛されることへの飢餓感、不感を疑わせるほどに愛を知らないで生きてしまった時間の長さに関わりの手がかりさえ見当たらない者さへいる。

そんな地点から子どもとの暮らしを始めてきて十年が過ぎた。初めの頃は抱っこすることで充分だった子どもたちも、中学・高校生が半数を超えてしまい、

ひとり一人の愛情要求がそれぞれに異なっており、意外な方法や内容でそして予期しない時に突然表現される。

三十年も前だろうか。両親の離婚、そして置き去りという残酷な状況に置かれた子どもが乳児院を経て入所した。

中学二年生頃までは学校の成績もまあまあで、ごく普通の野球少年として成長していた。

その子どもが中学二年生の二学期あたりから学校に行かないで海岸辺りをぶらぶらして帰るようになり、保母の言うことなどはことごとく無視して時には職員に暴力を振るった。

当時の保母たちは、ことが起こる度に、彼には、「菅原先生に言うからね」。どういうわけか、養護施設で働き始めたばかりの私には反抗しない彼のことを、「何とかして下さい！」と言ひ、彼が卒業して出ていく日を願うようになっていた。そんな彼のそれまでを薄っぺ

らいケース記録とずいぶん前の相談所からの記録、朝まだ暗いうちから、近くに就職していた先輩たちと校庭での早朝野球に興じながら作る関係の中で、施設の子どものには高校なんかない、だから勉強なんか意味がない。どうせオレは施設の子どもなんだ、という絶望的自我感覚が彼を荒れさせていたのだらうと思ふようになっていた。

梅雨の晴れ間のある日、海岸の県立公園の遊歩道を彼とぶらぶら歩いていたら、「オレ、学校を休んでよくここを歩いて時間をつぶすんだ」と彼が言い出した。「どうして学校を休むんだよ」「勉強なんか大嫌いだからさ」「そんなことないだろ、二年生まではクラスで十番以内に入っていたのに」「どうしてそんなこと。オレたちには高校なんかいないんだよ。どうせ学園の子どもなんだ」そんなやりとりが、何とか高校へ行かせたいという私の思いを確信に変えた。

それから、私の高校進学への勧めを彼は信じるそぶりもなく、荒れた暮らしが続いていた。そして六月のある夜、同室の

二人がいない六畳の部屋に寝こんで「お前、親たちに会いたいとは思わないか？」何のことからか自然にそんな大変な質問をしてしまった。

「どうせオレのことなんか・そんな奴等に会ってもしょうがないじゃん」と、声を落として本当に寂しそうに言った。

私にはそれは、オレのことを覚えていて欲しい！、会いたなんだ！、と心底から湧いてくる呪文のように、絶叫と聞こえた。今でもきちんと子どもを育てるには大変なものなのだが、その頃の福祉施設は貧しさの限りで、子どもたちの口を糊するだけで精一杯だったから、養護施設の業務として親のことなど構いようがなかった。

記録に服役とあった父の消息は不明で、定時制高校を卒業し八王子の鉄工所に働いている彼の兄を尋ねてたのは数回の休日と貧しいポケットマネーを費やした夏の日の午後だった。

そこから結婚している姉が分り、有名私立高校の栄養士をしていた母にたどり着くのに手間はかからなかった。以下次号。

日誌抄

二月一日
四月十日まで

二月六日 江森ヘヤーサロンより散髪のご奉仕。毎月。感謝。
十日 あすなろ文庫の人たちが蓮田南小学校に呼びかけて集めた書籍千三百冊余りを阪神大震災の神戸市東灘区本庄小学校へ社会への出発を前にした匠、悟と菅原 がワゴン車で。三十数時間の強行日程で。
十一日 日本キリスト教団西千葉教会の国井くになが氏より匠、悟の就職祝のネクタイを。同日の席上献金のご寄付も。
十六日 町内オオタニよりレタスをたくさん。感謝。
二二日 元タカラクラブの松永実枝子氏より舟森姉妹にすてきなプレゼント。ありがとう。
二三日 ベテル幼稚園より衣類などをたくさん。ありがとう。
坂戸市熊原基哉氏よりバザー用品をたくさん。感謝。
二七日 森光子、埼玉県立宮代高校受験。
三月一日 町内豊野の遠藤千代子氏よりお米を。感謝。
二日 東京電力ヴォランティア

グループハムコ会より、悟、匠に広辞苑を就職祝に。感謝。
四日 大利根剣友会の小林氏より町主催の音楽会のチケットを頂く。楽しい一タを。感謝。
七日 森光子、県立宮代高校に見事合格。祖父や叔母夫妻、教師や学習ヴォランティア、教会学校の教師などたくさん駆けつけて合格祝いを。
八日 栖賀匠、県立北川辺高校を卒業。
九日 小林悟、県立栗橋高校を卒業。
十三日 森紅子、大利根中学を卒業。
二〇日 悟、町内の割烹萬屋で半年間週二回の実習を終わり、一泊社員旅行にご招待さる。
二三日 小学校卒業式。四名が思い出を胸に卒業。感謝。
二四日 初の二名の卒業就職を祝う会「第一回出発の会」教師、家族、関わった元職員やヴォランティア、東大宮教会壮年会、教会学校教師など関係者、理事数名、後援会役員などが集い、励ましとお祝いをたくさん。感謝と感動の夕。
二六日 悟、二七日匠引越す。

二七日 第四二回理事会。一九九五年度事業計画、予算、施設長人事の審議と承認など。
三一日 指導員黒田俊雄、施設長関公雄退職。
四月一日 指導員下山英哉、保母笹山恵理、施設長菅原哲男就任。十一年度目の新体制。
二日 岩本守弘、豊美氏より献品とご寄付を。感謝。
四日 浦部祐夫氏より食器を。
〇中学三年生受験に向かう気構えを確認する奥秩父行。
六日 江口利和氏よりリンゴジュースを。感謝。
七日 入進学祝い。
十日 中学、県立高校入学式。年度を送り、新年度をこのように始めました。(くら)

一九九五年度基準外職員の確保のためにバザーを行います。不要品などのご協力をよろしくお願いします。

送り先は光の子どもの家気付。

期日 六月十日(土)

バザー実行委員会(しずくの会・光の子どもの家後援会・個人有志・社会福祉法人光の子どもの家が構成)

反射光

☆子どもと十年ぶりに浚ってきれいになった入口の小さな池に金魚を放すと、

少なくなった小さな子どもたちが周りを囲みます☆十年ぶりという話や事柄が日常について回ります☆異様な程の反対運動が《正常化》するために今関氏を施設長として加え十年もの時を要しました☆この家の基礎固めのために貴重で希有な働きを惜しまなかった氏に深甚の感謝を捧げます☆十年目で卒業就職の社会人を立派に育てました。様々な意味で目当ての先輩を得てようやく家としての体が整いました☆これまでたくさんの方々のお支えに改めて感謝致します☆本紙はお支え下さる皆様へのお応えとして私たちの働きをお伝えすることを目的に編集発行されてきました。文中の子どもたちの名前は子どもが本名にしたいという場合以外はすべてペンネームにしています☆今後その本筋は変えませんが。どうか厳しいご叱正やご感想などお寄せ下さい☆これまでに増してのご支援を！心から。(哲)